

創業400周年

江戸時代の松坂屋

平成23年3月5日(土)→5月29日(日)

今から400年前の慶長16(1611)年、織田信長の家臣であった伊藤蘭丸祐道が、清須から築城さなかの名古屋へ移り、本町に呉服小間物商の店舗を構えたのが、「松坂屋」の前身「伊藤屋」の始まりである。

万治2(1659)年に茶屋町に移転。元文元(1736)年、呉服太物小売りへ転業し、「現金掛け値なし」の正札販売で成功をおさめた伊藤屋は、延享2(1745)年に高級呉服の本場・京都に仕入店を開設し、宝暦13(1763)年には隣国・岡崎に出店を構えた。

そして明和5(1768)年、上野広小路の松坂屋を買収し、最大の消費地である江戸へ進出した。松坂屋改め「いとう松坂屋」は、度々の大火、安政の大地震、上野戦争など歴史的な災害や事件に直面しながらも、その都度切り抜け、江戸を代表する大店へと発展していった。

文化2(1805)年には、大伝馬町に木綿問屋「亀店」を開業した。

ほんだな

一方、名古屋本店では、尾張藩御用達として重きをなし、本業以外でも、安政3(1856)年に木綿問屋「松店」を開業するなど、ますます業容を拡大していった。



「上野広小路正月の賑ひ」

(歌川国芳、天保年間)

国芳は、美人画や役者絵で人気を博し、歌川派を幕末期最大の浮世絵流派とした豊國の門弟。天保年間(1830~1844)のお正月の風景が、美しいアッショントモに描かれている。



「東都大伝馬街繁栄之図」

(歌川国重、天保14~弘化4年)

文化2(1805)年、大伝馬町一丁目(現・中央区日本橋本町三丁目)に木綿問屋「亀店」を開業した。木綿問屋が軒を連ねていたこの地は、幕府の命により、銅瓦、箱棟、家切などすべてが美麗な造りになっていた(右から3軒目が伊藤屋)。



「上野広小路松坂屋の晩鐘」(『東都見立呉服屋八景』)

(歌川豈国、文化13~天保元年)

文化・文政期の江戸を代表する呉服屋を、歌川豈国が「東都見立呉服屋八景」として描いた中の一つ。このシリーズは他に「唐崎大丸の一つ松」「越後屋の暮雪」「岩城升屋の落雁」などがある。



中部圏を網羅した法衣の引札
(嘉永5年)

各宗派の僧衣を独占的に扱っていた上野店と連名で、嘉永5(1852)年春に配った引札。「法衣の品揃えを強化した」ことを謳っている。配布枚数はおよそ3,700枚。配布区域は、尾張、三河、美濃、飛騨、伊勢、遠江、信濃の7カ国。当時の商圧は意外と広かったのである。



「尾張名所図会」(岡田啓、野口道直、天保12年)

(京町通茶屋町 伊藤吳服店)

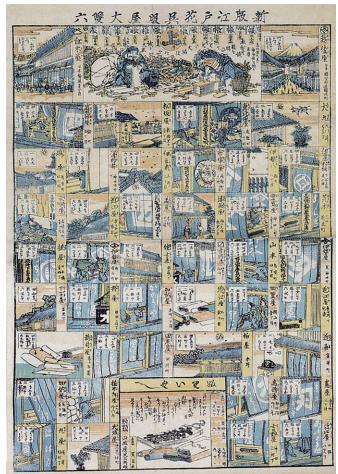
この家は、もと尾張本貫の武士にして、先祖源左衛門、幼名蘭丸(森蘭丸とは別人なり)贈太政大臣信長公に官士し、天正十年、公薨逝の後、浪人して清須にありしが慶長十五年の御遷府より名古屋に移住し、万治二年より呉服屋となる。江戸上野広小路をはじめ、諸国に出店もありて、家富み数代繁栄す。清須山王の社の拝殿にかかる古き猿画の扁額(俗に絵馬といふ)に「奉懸御神前慶長八癸卯歳 伊藤蘭丸」と見えたるは、すなわちその牢人たりし時の寄附なりの解説文がついている。





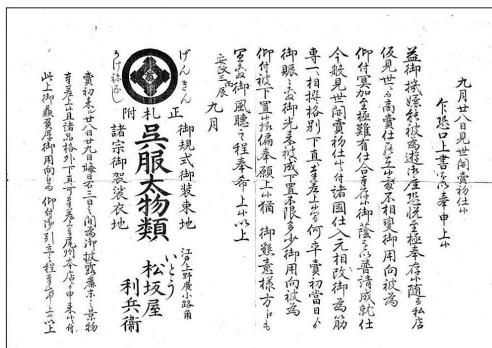
「浮繪下谷広小路見世之図」
(歌川広重、天保末年(1840前半)久保田金匱模写)

浮絵とは、西洋画の透視遠近法を応用し、画面の奥行きや距離感を表した絵のこと。歌川広重の天保末年頃(1840年代前半)の作品を、画家で松坂屋宣伝部員の久保田金巣が模写した。



「新版江戸花呂服屋大双六」(江戸後期)

江戸後期の呉服屋を題材にした双六。越後屋、白木屋、大丸、恵比須屋……伊藤松坂など42店が描かれている。中ほど左には、文化4(1807)年に名古屋から江戸へ進出した水口屋も見える。



江戸中に配った安政三年の引札

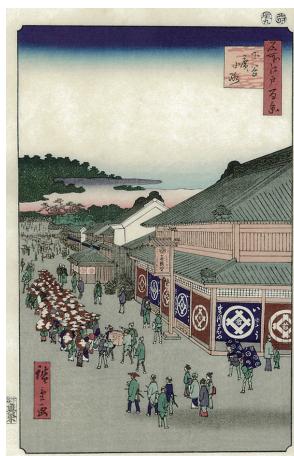
安政3(1856)年9月28日の「新築大売出し」で配った引札(チラシ広告)は、上野店の支配人6代目右衛門(本名高木幸兵衛)が書き残した記録によると5万5,000枚。当時の江戸の町人口は約50万人。そのうち、名主、地主、家主などの上層町人はおよそ18万人で、戸数では3万5,000戸前後であったといわれているので、江戸中に配布したことになる。

大々的な広告が奏功して、売上高は3日間で3,150両に達した。



「松坂屋店前美人図」
(菊川英山、文化10~11年)

文化10・11(1813-1814)年頃の「いとう松坂屋」の店頭風景。今日のファッション広告の原点ともいえる錦絵広告で、看板や暖簾を背景に美しく着飾った女性が描かれている。菊川英山筆。



「安政の大地震」と 上野店

上野店
安政2(1855)年10月2日夜の
10時頃、江戸が安政の大地震に
襲われた

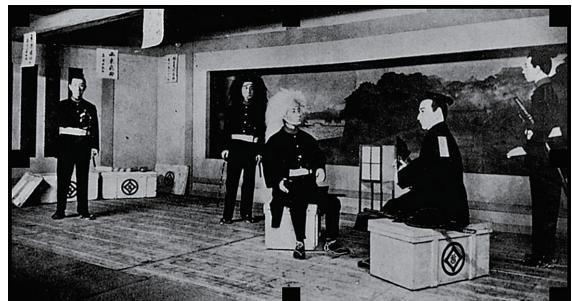
この大地震の状況をつぶさに検証、
記録した「破窓の記」(著者は
日本橋西河岸居住の一家主)は、
上野店を「江戸商人第一の損失
なし」といっている。

なり」と伝えている。
店舗の再建は、名古屋から駆けつけた11代竹中藤右衛門(現・竹中工務店)が行い、翌3(1856)年に完成した。
このとき新築の上野店を描いたのが、歌川広重の「下谷広小路」(『江戸江戸百景』)である。



吉宗拝領の「えびす像」

恵比須屋の初代島田善右衛門が8代将軍吉宗から拝領した神像。明治8(1875)年に大阪の恵比須屋を買収したときに伝わった。



「上野戦争」と松坂屋

江戸進出からちょうど100年目の慶応4(1868)年5月15日、官軍と彰義隊の戦いである上野戦争が勃発した。

従業員が菩提寺である願信寺に立ち退いたあと、官軍は上野店の2階に本營を構えた。そのためか、広小路一帯が焼け野原にならった中、上野店だけは焼けずにそのまま残った。5月17日には、官軍の西郷吉之助（隆盛）、橋本実梁少将、熊本藩の細川侯たちが休憩のため訪れて、それを見物人に大勢が詰めかけた。